

チャット内 質疑応答まとめ

附属大泉小 山下美香司書教諭の事例への質問

Q: このマップは一体いつ頃の版の物からついていたのでしょうか？

A: ご質問いただいた「車のいろは空のいろ」シリーズの地図ですが、ポプラ社に問い合わせをした結果、以下の回答を得ました。

「2000年に刊行しました「車のいろは空のいろ」シリーズの3冊、

『車のいろは空のいろ 白いぼうし』

『車のいろは空のいろ 春のお客さん』

『車のいろは空のいろ 星のタクシー』に、初版から見返しに地図を掲載しております。

1968年刊行の「ポプラ社の創作童話」シリーズの3巻目『車のいろは空のいろ』の見返しにも地図を掲載しておりますので、シリーズは違いますが最初の掲載という意味ではこちらがはじめになります。」(附属大泉小司書 富澤)

Q: この情報が、子どもたちの読みにどのような影響を与えるのか気になるところです。

A: 地図は重要な情報源になると思います。(附属高校司書 岡田)

Q: 大泉小の探究科の学習について詳しく知りたいです。

A: 附属大泉小学校の「探究科」についてはこちらにも紹介されていますね。

<https://mainichi.jp/articles/20200309/ddm/013/100/048000c> (鎌田和宏先生)

A: 探究科の学習は、社会科、理科、総合的な学習の時間の時間をまとめて探究科の時間としています。まず、学習のテーマを児童に与え、それがどういう意味であるのか自分なりの意味形成をしていきます。大切にしているのは日常生活とつながっている、体験的な学習ということです。私が担任している4年生は「ものづくり精神～試行錯誤が未来を形作る」というテーマで今、学習を行っています。未来の技術の電気回路の製品を作ったり、伝統的な技術の江戸小紋から染め物の学習をしたりしながら試行錯誤を自分なりに捉える学習を行っています。(大泉小 山下)

附属小学校の司書教諭への質問

Q: 学校図書館の資料とタブレットを併用した学習活動の事例はありますか？事例があれば、其々を使う場面がどこか、なぜそのように住み分けたのか、結果的に子どもの姿はどうだったのか知りたいです。

A: 世田谷小学校の梅田です。使い分けを教師がさせるというよりも、子どもたち自身が使い分けできるようになることが重要であると考えます。あえて書籍に限定する場面は先程もお話させていただいた、情報源の比較をさせた場面です。

A: 梅田先生の「子どもたち自身が使い分けできるようになることが重要であると考えます。」が大切だと思いました。(鎌田和宏先生)

Q: 全学年にタブレットが渡されますが、子どもたち自身を使い分けできる学年は概ねどのくらいだと感じていらっしゃいますか？子どもたち自身を使い分けできるまでは、どちらかに限定しながら、双方を目的に応じて使いながら、使い方を習得させるのでしょうか。

A: タブレットで何を使って調べるかによっても大きく異なると思います。また、インターネットでも、ポプラディアネットなどは、ポプラディアと同じようなものなので使いやすいかと思います。サイトを限定しない形での、イーネットでの調べ物は、経験を積ませないと上達しません。3年生ぐらいからどんどん活用していくことが必要だと考えます。(世田谷小 梅田)

Q: 梅田先生ありがとうございます。最近学校図書館が使われなくなると周囲から心配されている中、これまで以上に学校図書館の効用とICTとの共存を意識していかねばと考えています。

A: そうですね。学校図書館という名前から、「図書」ばかりが着目されますが、「図書」を中心に多様なメディアに触れられる場になると良いなと思っています。ICTの活用は、今後の流れ(GIGAスクール構想など)を考えると、先手先手で導入していくと良いのではないかと考えます。(世田谷小 梅田)

Q: 「かがく」とは？

A: 【「科学」をどう捉えるか・・・】SKの単元では、植物をよりよく成長させる方法。具体的には栄養を与えたり、日光を当てたりなどがあります。さらには、それに気づくプロセスにおいても問題解決の流れが生まれてくるので、論理的思考なども含まれてくるかと思っています。かなりいろいろな面を想定しています。「科学的手法を用いることで自らの追究したいことが追究していける」というあたりも重要だと思います。(世田谷小 梅田)

附属世田谷中学校 渡邊裕国語科教諭の事例への質問

Q: 情報クエストの詳細を伺いたいです。

A: 「情報クエスト」については、あらためて取り組みの全体やそれぞれの取り組み(そこで取り上げられた項目なども)がわかるように整理したものを資料としてお示しできるようにいたします。(世田谷中 渡邊)

附属特別支援校 野原隆弘司書教諭の事例への質問

Q: マルチメディアデイジーの選書と利用法は個別に対応されているかと思います。どのように設定されているか教えて頂けますか。

A: 地域図書館に子どもたちが知りたいテーマに応じて選書してもらっています。(附属特別支援校 野原)

A: デイジーの選書ですが、欲している子どもたちの様子が難しいです。本校では、デイジーコーナーを作り提供していますが、単にカット絵とPCの読み上げでは子どもたちが飽きてしまいます。やはり映像

にリアルさがあったり。生録音などが入っているものが好まれます。学習のテーマに合ったものを奨めています。また、利用は個別に対応したいのはやまやまですが、時間数に限りがありますので、クラス全体で一度話題にしたりして、興味が見られたり、リクエストがあった場合に継続して取り組みます。がYouTubeにきりかわってしまうことがよくあります。中・高生は担任より機器が上手に扱えます。(附属特別支援校 野原)

A: LLブックを読んでいる子どもたちの事例でしたが音声ができず、すみませんでした。LLブックで自信をつけた子どもが魔法の宅急便が読めるようになった事例でした。(附属特別支援校 野原)

Q: ブラウザ読み上げ機能の使用状況と、マルチメディアデイジーなどとの決定的な違いがあれば教えてください。

A: 子どもの欲している内容によっては、読み上げ機能で充分かと思いますが、(デイジーは)物語等を途中で止めたり、早さを変えたり飛ばしたりが自由にできます。また、先日有楽町でデイジー研修があったのですが、デイジー子どもゆめ文庫で、たくさんの内容が出始めました。魔法の宅急便などもあります。今話題の鬼滅の刃などにも取り組んでいるようです。

デイジーでの音声は、読み聞かせの専門の方、声優に近い人がボランティアで参加しておりますので、読みや間が絶妙です。違いはそこにもあるかと思います。(附属特別支援校 野原)

コロナ禍における学校図書館の取り組みへの質問

Q: 学校図書館で電子書籍をどのように扱っているのですか？

A: 世田谷中では、スクールEライブラリーに関しては、1年生と2年生は年間契約をして、どこからでも電子書籍が読めるようにしました。2年生は休校期間中に、そこから何かしらの電子書籍を読む課題を教員が設定しました。電子図書館システム(ライブラリエ)に関しては、岩波ジュニア新書50冊と岩波少年文庫50冊のセットを入れた他は、中学生が読みそうな物語重視で50冊ほど購入しました。あくまで自由読書の一貫として、導入した段階なので、筑駒のような授業の課題に電子図書館を利用するには至っていません。(附属世田谷中司書 村上)

A: 附属高等学校では、ジャパンナレッジ、朝日けんさくくんを「自宅で閲覧可能」の連絡を行い学習に活用しました。今後、電子図書が購入しやすい価格になり、資料の分野が広がれば学習での活用が盛んになると思われます。(附属高校司書 岡田)

A: 電子書籍の利用期間の問題もあり、まだ課題の多い電子書籍や電子図書館システムに関しては、次年度の研修を企画検討中です。(附属学校司書部会)

以上